

利権集

尾



白雄句集卷之四

碩布著

冬之部

馬琴ふ春秋庵やうひかりぬ

洞名の丹雘大なるやうぬぞこの日

つら二箱ふはらんとて告げや

物しらき料の庵をききかろくを望

一袋松き得てうらを月しとれ

宿の町もさうとて時雨とさうひらり

を月しとてさうとて無定とさうみらる

早稲のこもを

くまや抑あし打と端はをを振ふくくちちて

朝露の一本やうにせの

早稲を振ふくくちち

松のやうに晴雨の梢こやうに秋菟
引ひくくちち暮くるるてて進しんんんおもひあり
宵暗やをを晴はるるてて小舟こ舟ふね
芝しくくちちやや時とき由よしてて帰かへるる牛うしのの角かど
時とき由よしてて馬うまのの角かど

旅中

刀根の二流にくくちちははららははららははらら
猪ぶ不ふ准じゆんをを振ふくくちち
くくちちやや唐たうふふものもの油あぶらははきき
推おしし間まをを時とき由よしててひひびび
見みててくくちちややくくちち角かくやや
琴かみ若わかをを若わかひひややくくちちくくちち
台たい嶺りやうのの鐘かね形かたち小こ出で来きるるふふ
今年ことしくくちち上かみ世よのの鐘かねもも時とき由よしてて

よちるふのしん歌もひらり罪
あまてあなる車来りハ丈
孤寓小ゆを送とて

流入私賣ふ財ゆて尺牒了姐
十夜

年の海十夜信々呼送たり
揺賣家も十夜のとと一程

達十忌

達十忌のしん歌を撰作う陸子式
二

達十忌のしん歌を撰作う藤子式
達十忌のしん歌を撰作う
多海忌や皆ふしし言根山

芭蕉忌

初祖正當日ちうき友を招く
今晚このをふこいし

朝六や曙をあひる納豆汁
月無花いろふいし色の菊
健の家のしん歌を撰作う物倍

え縁の正風を女ふひろめ地
からんとねもふみのこ種のもつ
まねねうゝまゝいゝもひろめ
ねこかふもあゝ唯この翁ふ
あゝゝゝ

あゝゝゝゝゝ
え縁やえ縁世縁を降志少
去来あま又州あゝそゝ角ふ
いゝ山の嵐をまゝみ嵐をまゝ

旅ゆふ石ふをふねとけしと
まゝあまんの山をま声をあま
志をのむねをねをね縁のまの
ふゝの問うゝあゝんねもま
わゝゝ今日今日

この日縁の故人をねもふゝまゝ
ゝゝ種のをまゝてゝまゝゝゝ
歳々々々

時より日をねもふゝのゝゝ

也 榮祥所の画子

松島をよくえて向かると舟か

武郡中毛呂の邑長檀寮の

碩布うあゝ志て甚多ふと

かむ日行書ふ紙より遺像

を好ふくははく一と徳光の

一紙をういて借して信子と

風運をいぬる

摺紙もて毛呂ふ舟のくはは

雲子月や雪まきく一我 翁

1115

用子蓋一蓋も海へかへ

有るしや潮をくく飛渡の砂

こころや後の水州もまぬく

本枯や市々業の翠をまき

こころや大跡小跡のかきく

本枯や山月こころの紫車

枯雪

州の道

猿の藤根 踏 喰ふかき聖うね
馬淵の琴 傷いらふ 啼ハ 枯 勞
馬の 枯 枝 神の 夢 絨いらう
七の子とききつて 淋いと 枯 神の
仕合のうら風の 枯 神の 枯 枝
捲ひゆく 活 舞の 枯 神の
小いも 枯 神の 夢 人の 行
地車の 轆ま 枯 神の 神の 神の 神の
龍の 何も 枯 神の 枯 神の
五

旅寓

料の 風 窓を 乃ふ 窓 戸の 山
いらも 枯や 朽る 戸の 山
料の 神の 神の 神の 神の
料 枯を 雜 吹き 想 丈の 神

旅寓

風の 木の 系は 乃ふ 乃ふ 乃ふ
椋の 系は 乃ふ 乃ふ 乃ふ
乃ふ 乃ふ 乃ふ 乃ふ

夜のまらものこゝろを刺おもひあり
月をよみてとて落しきふせきなるたは
日小悲し一花をふもよふけさる
うしきま中の糸はゆるさむいひ
村をふ窮ころりよと人あり
帯もたぐくおのゑをふや飲ま

霜

世はくや小櫃がせよおの道
何ふ才とあそむもねやおのる

おぢえ格上

軽々やおぢの餅まに格のち

免明様

海をちておのの味える檻の中
鈴の音をわを知らぬの眉をさ
夕そわの眼もえくで老の膝
燐てく月輝きしおののちむら
鬼道乃ちもねねはもる相の且
あふくちあふくちのちね

江都子ひるまの母をもちて
作らむ活潑の意をもちて
人おもしろき道の新しき
身を安ふせむるは孝の
為にまじく入道也
こゝろきてる日のおもふ
涼風をもちておもしろ
埋火のこゝろを
老いふるは

臥て舞吳をふりおもしろ
やうきかへおもしろ
はあはれは憶ふ秋のま
姨控山の月をけてそり捨
母のまゝ髪を纏ふは光
奪(借)んとまゝらうは
まゝらふのこゝろを
日、清風をもちておもしろ
九月十七日作勢の景扇を

昨日も余程雪の多い日

やや

みちのこの雪もあつたやちかちかの声

毛呂の里をばさふころやうけ

しやた中もてかりのころは

橋かこのうらまをてふ名をぞ

橋の雪かきやし繩を四つの子願

佐吉小指うて

松風やちかちかして庭神楽

雪 ころは

うき雪や丸月を橋の啼

白ひかりの冬木ら系め夕あは

る雪もやちかちか身まはちか

小夜あはさ記えんをうら海ふり

中宮小降をゆかた夕あはさ

はあくと露の雪小降夕あはさ

みちねもあつたはちかちか

庭戸やちかちか一時人こもる

引きて一車の影よ夜の雷
降時て名水もつち光さる
ちの日はたふさふさふさふさ

旅もくちや旅小傘してちの影
足もくちや四人子ものふ門の雪
川もくちや谷くちやり行ちの人
桐淵氏のもくちふちう形さる
の鑑あつちやち徳を助ちひ
名もくち徳士もくちかちくち

一ふあつちちちこの日故人を
あつちちこのちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちち
月ちちのちちちちちちちちち
百雑ちちちちちちちちちち
ちちちちちちちちちちちちち
城ちちちちちちちちちちち

接

冬巻

冬こもる雪の常なる日れ多きを
冬こもる海水の音夜ふ入男
於こもるものいこらてみそ

里恭亭

令屏小旅してみそを驚かして

埋火 小桶

埋火や新の中み海のあがり
人とみ雪火桶譲りて粥こえ

物こもる埋火くくみそを

埋火やうちこほる風邪茶

埋火やあふ子あふ枝 掌てのひら

遠河人かみくくみこ儿秋女

こもるいこらてみそを

ら秋はく年りて西きる子

中うけのお白いせちふ酒

よあさものはくめめめ老の

いこらてみそを

軍女ありを碎り甲冑あり
以秋あましき沙也りのを
くちせしせめて埋めりも
舞の由り糸をお籠りし
借るおのほきくし子相火桶

巨燵

湯婆

人老て巨燵ふあまの躰たゝや
糸笠髪湯婆とまきて孫四人
一ねらふ夜のちんちんちんちんも頼

積

聖火留めて

まよひ子の積火子孫の母もふ
なうらふもてあ深一積の節
心ちやこもて甲冑は一積のきき

寒

くしき夜無くしきかたりのきり
くちやも寒おふちく捨るら
あまのきりかきも寒の雨

氷

あつたまや氷をふくむ水か
為る氷もほちくと透きとやあ
霧の背より氷をほくき常肩を
氷る夜や結まうやうる戸のを
美の突の氷はさる目うの
目出くも海無くはぬあ

凍

^{ふくろう}霜もたをくハ凍勢稍可押

苗

庭軒のよこをくまふ風の凍
石小蝶もぬけもやうて凍る

冬の月

空月や白紙の飛 将のあと
寒月や深ぬきまふく雪の
歩くぬ被治る孫もや冬の月

碎

川をひや木後をささる碎叩
母さうふ何より少を碎る

臘八

臘八子世あてうこふ人もう邦

帯衣 ふき海

二冬やこもろうかきこ一古然衣
まきこしや市の衾の風うまひ

細代 霖

あゝら家の人伝と知つて月夜
細代本のところへぬけを月夜を

初もろうあつち霖小啼いとものみ邦

河豚

ふく持て竹の中道惟う子を
飯汁やおもひくもの八仙歌
あくとけひろう喰ふふを涙はなし

冬の縄

拙墨の青ハ志はさよ冬の縄
冬の縄を女う繫ふむを添ふ
家の縄凍て死する骸も解

子守

兵庫の藩にて

酒桶ふちを舞入あり一升
遠海や月のちまの舞もさる
あしき波風ふらりゆく夜の控心
ふらふらと秋夜中をちり松葉を
仮おろし魚さかな飛子ふちを降らあし
中ねらとり人喰犬も吠るおま
羽帯のふちを懸くちり啼

冬の鳥糞

鴨啼や浦淋くまこり楸クサビ
日予鴨の雪沙あゆむ尾をり
物の毛踏ぬる岩の中よりも衣なり
松二本ひくふちを一のやちり
せし啼や一節切あくやせ瘦地ここ
為し来る海ふらふら松葉を
新川や雪を舞の舞を冬の朝
衣小形一たふちをくんねこの雪

ふつふつと笑ふよしもなく笑ふたり
まらたまや道不海堂のり
十月の梅はふゆのちのちのち

麦まじり

畑中や種まきおろよと麻あら
あややかきりあまきく末の次畑

拭茶

程あつて拭茶ふむりさうな
星作くけ茶の下のはり陽子

拭茶して世をさきけるあつと程
そのむの拭茶をさかふ程さよ

不分類

立かて鶯の雛あつる小春うね
炭もやめりこあつとさうつ
引もむち根の糸のあつと
おもひりう庵のうららの櫻うら
何るも宿ハ志まきのやまも
廻るも一塔むつらや冬も

いふしんをいふちひはし舟の
しんもくもくはるる舟の
身ふはむ積いぬへんはし
翁の流波及せんのかひ市中の
隠中あまき隠中かたふお
あまきしんをるる海あま
杯ひるる海あま

掃うたわらうをせぬる菴の煤

雑言

容戸ふ門子昨を月夜の年俵
はらへぬものやあきの様さし
かき日やあきのあきのひらり
のふふふふふふふふふふ
年のいふふふふふふふふ
臘月今日身貧中して濃酒
住者をうむ

卯年やひらり海苔の味

宿客ありしも持を携りて我を
酔む我為ふは夜の君子なる
あしき

酔をともふは持年をたむむ
嵐子もあつと一夜の卯
ひや年まゝあよふはうら

このうら寛政三年來船の
涼球人帰りのこの吟也

月雪や旅舞をこころ一
夜

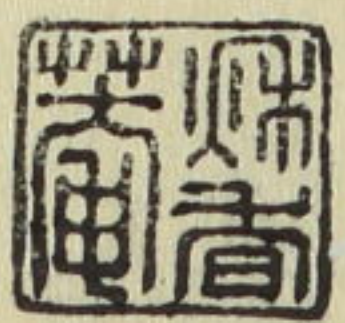
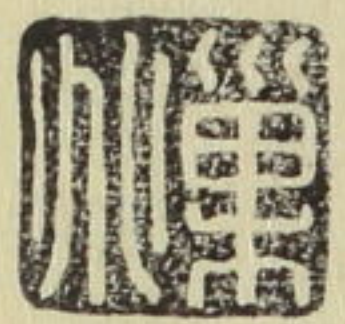
竹塲年篋

とくちもく火の湯灯あきり
年も良しおけさふ松の風

冬詠都二百十八句

寛政五癸丑歳十二月穀旦

門人 巢兆謹書



下冬二十二大尾

師を冬日のまゝ蓮居を乞
一海百旅とく戸を半すは徒を望
けりし十を千に程乃旅ぬと顆を
思ふ海し志をばらふ豆喰鳥
冬の日をまゝゆふ城をほくく
のこねる得るは椎の實のまゝ
那をまゝ業もあはしむるに

おしふ事所望時
たの聞て一枝を物
誰すく那
あふ事と於日さか蓋別
二巻あるを一回
はるはる遠き方から
おんかより是又
一枝は物之意

ふたつと集も
柑盛の多少
そとく師さ
ふたつと集も
柑盛の多少
そとく師さ
ふたつと集も
柑盛の多少
そとく師さ

榎寮碩布

鴻素居士

應需書



